

汲古一心

『仏さまたちのお集まり』(二)

中村素堂

昨年、秋も大分深くなって、西バキスタンの北の方にガンダーラ国の仏教遺跡や博物館などをめぐりながら、大きなスツーパーの崩れた姿や、またおおかたは仏頭の欠損している仏像などを拝み、またカニシカ王が作った仏舎利の壺を見たりしつつ、落葉の音が街中にあふれているようなアフガニスタンの首都カブールに着き、この博物館にも通つて、ガンダーラと同じ最初期の仏像といわれる古い古い仏さまを拝むことができた。さらに足をのぼして、遠くソビエト連邦に近い雪のヒンズークシユ山脈を背に、パームリアン溪谷に立つ世界最大の大石仏を拝みにでかけた。この広大な溪谷の岩壁に作られた何百という仏堂も僧房もみな半壊の状態で、高さ五十三メートルの大石仏も顔面は崩れ、片足は膝上までほとんどないというお姿で、唐の名僧玄奘三蔵がインドへ行く途中に訪ねられた時分には、この石仏は金色に輝いていたと記されているが、今は想像も出ない惨状である。ただこの大石仏を納めている岩のアーチ型に掘られた仏龕の天井に、古代ペルシャ風の彩色模様の美しく遺つていたのだけが、わずかに栄えたむかしを偲ばせていた。

そしてガンダーラもこの石の仏さまも、みな創建当時から信仰した人々の一片のことも刻まれていないのである。淋しいことである。今は全く異教徒の住む土地となった中で、静かに崩れ去ってゆく仏さまたちのこれはまたなんとという静寂なお姿であろうと、半日晩秋の陽を浴びながらさまよい歩いてきた。

これに比べると中国の人のむかしからの記録癖は、龍門のみ仏にもひとつひとつあんなに美しいことを添えて、今のわれわれにも心に通うものを遺して、深い信仰を呼びかけてくることは、たまらないほど有り難く思えてくるのである。

長谷寺へ詣り、あの説相銅版が塔とともに一度火に遭つた跡に、

ごく最近できた朱の漆がまだ匂うような美しい五重塔などを見ると、日本人はたしかに立派な信仰を持ちつづけていることを感じさせられる。と同時に、今のわれわれは今のことばで、仏さまを拝みつつ暮らす朝夕の心を記して、みずから信心の深まりを省みたり、まわりの人々に呼びかけて同行を誘うよすがにしたらと、銅版や龍門の字はおしえてくれるようにも思えるのである。

〔「光明」昭和四十二年九月〕

〔筆間雑記〕中村素堂隨筆集(昭和六十三年刊)より転載。

